

大分県佐伯での国木田独歩の体験がもつ 「風景の発見」の基盤としての意味

中川 嵩章¹

¹学生会員 東京工業大学 環境・社会理工学院 博士後期課程 (〒152-8550 東京都目黒区大岡山 2-12-1, E-mail: nakagawa.t.aq@m.titech.ac.jp)

本研究では、国木田独歩が「武蔵野」の発表より前に大分県佐伯に滞在していた約10ヶ月間の体験に着目して、佐伯における国木田独歩の関心と見かたを明らかにすることを目的とした。まず、計量テキスト分析に基づいて、日記『欺かざるの記』から、国木田独歩が「人」と「自然」の関係を追究していたことなどを読み取った。次に、5つの文学作品における人物・風景・心情描写の構造から、国木田独歩が無名の風景に注目したメカニズムとして、a)聴覚、b)時間軸、c)身体による見かたの形成が明らかになった。こうしたあらゆる感覚を働かせて、眼前の風景を生々しくリアリティをもって感じる体験を蓄積し、時間をかけて、かつ、身体を通して、「風景の発見」の基盤となる見かたを形成したといえる。

キーワード: 国木田独歩, 風景の発見, 無名の風景, 大分県佐伯, 身体性

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

明治時代の中頃になって、探勝的な態度で名所などを描写するのではなく、無名の風景を描いた文学作品が新たに登場した。このことを「風景の発見」といい、和歌や俳句などにおいて近世以前から続く描写の態度から、近代的な風景観へ、大きな転換が起きたことが知られている。ではなぜ、「風景の発見」はなされたのだろうか。

柄谷行人は「風景の発見」について、日本の小説でありふれた風景が自覚的に描かれたのは国木田独歩の「武蔵野」や「忘れえぬ人々」がはじめてであったとして、その要因の一つに「ある内的な転倒」を挙げている¹⁾。

「ある内的な転倒」とは、国木田独歩の知覚の様態が変わったことを述べていて、見かたの変化によって、従来とは違った新しい風景が見出されたことを説明している。したがって、「風景の発見」の起源を解き明かすためには、国木田独歩という一人の人間の中で、なぜ見かたが変化したのか、国木田独歩の人物史を紐解くことが重要であると考えられる。

そこで、国木田独歩の経歴を追うと、1898(明治31)年に「武蔵野」と「忘れえぬ人々」を発表するより前に、1893(明治26)年9月30日から1894(明治27)年8月1日までの約10ヶ月間、大分県佐伯に教師として滞在していた。国木田独歩の文学作品には、1897(明治30)年の「源叔父」や1898(明治31)年の「鹿狩」など、佐伯を舞台にしたものはいくつかあり、この期間が「文豪独歩の基礎を養成し

たと云えるほどの大切な時代²⁾であると指摘されていることから、当時の体験が「風景の発見」に影響を与えた可能性がある。以上より本研究は、大分県佐伯での国木田独歩の体験がもつ「風景の発見」の基盤としての意味を論じるために、佐伯における国木田独歩の関心と見かたを明らかにすることを目的とする。

(2) 既往研究

柄谷行人³⁾は、「ある内的な転倒」が起きた要因として、言文一致という言語レベルの制度と、「内面」をつくり出す告白という制度を挙げていて、国木田独歩の日記『欺かざるの記』はキリスト教徒としての告白であったと述べている。一方、木股知史⁴⁾は、勝原文夫作成の図式⁵⁾を引用して、「風景の発見」は旅行者の審美的態度が生活的景観に加わることと説明している。これらの議論を踏まえながら、加藤典洋⁶⁾は、「内面」の発見より「たんなる風景」の発見が先にやってくると論じ、李孝徳⁷⁾は、「遠近法と言文一致体という表現のコード化」が要因であると述べている。岡島直方⁸⁾は、「忘れえぬ人々」を分析して、風景と切り離しては表現することができない特殊な人間であったと指摘している。以上の研究に対して本研究は、国木田独歩の人物史に着目して、一人の人間の見かたが形成された過程とメカニズムの一端を解明する、という研究の切り口に独自性がある。

小野茂樹⁹⁾は、国木田独歩の大分県佐伯での生活と、その文学作品に関する研究の中で、多くの史実を明らかにした上で、キリスト教、イギリスの詩人Wordsworth、

表-1 国木田独歩の略歴

数え年	年	月	出来事
1歳	1871(M4)年	7月	下総国銚子に生まれる(戸籍上)
4歳	1874(M7)年	7月	下谷中御徒町に移住
6歳	1876(M9)年	2月	山口県山口町に移住
7歳	1877(M10)年	1月	広島に移住
8歳	1878(M11)年	5月	山口県玖珂郡錦見村に移住
13歳	1883(M16)年	10月	山口県山口町に移住
15歳	1885(M18)年	9月	山口中学校初等科入学
17歳	1887(M20)年	3月	山口中学校退学、その後、上京
18歳	1888(M21)年	5月	東京専門学校(現在の早稲田大学)英学部入学、この頃、牛込区早稲田町に転居
21歳	1891(M24)年	1月	一番町教会において受洗
		3月	東京専門学校に退学願を提出
22歳	1892(M25)年	9月	『ワーズワース詩集』を入手
23歳	1893(M26)年	2月	日記『欺かざるの記』起筆
			自由党機関紙『自由』入社
		4月	自由社経営難のため解雇を申し渡される
24歳	1894(M27)年	9月	徳富蘇峰から大分県佐伯の教師を勧められて赴任
		8月	大分県佐伯を出発
		9月	国民新聞社入社
25歳	1895(M28)年	10月	従軍記者として広島へ出発
		3月	国民新聞社に復帰
26歳	1896(M29)年	5月	★「豊後の国佐伯」を『国民新聞』に発表
		11月	佐々城信子と結婚
27歳	1897(M30)年	4月	信子と離婚
28歳	1898(M31)年	8月	★「源叔父」を『学芸倶楽部』に発表
		1月	「今の武蔵野」を『国民之友』に発表 (『武蔵野』収録時に「武蔵野」と改題)
		4月	「忘れえぬ人々」を『国民之友』に発表
		8月	榎本治子と結婚
30歳	1900(M33)年	12月	★「小春」を『中学世界』に発表
31歳	1901(M34)年	3月	第一小説集『武蔵野』を民友社から刊行
		11月	「牛肉と馬鈴薯」を『小天地』に発表
32歳	1902(M35)年	12月	「空知川の岸辺」を『青年界』に発表
33歳	1903(M36)年	3月	「運命論者」を『山比古』に発表
34歳	1904(M37)年	3月	★「春の鳥」を『女学世界』に発表
35歳	1905(M38)年	7月	第二小説集『独歩集』を近事画報社から刊行
36歳	1906(M39)年	3月	第三小説集『運命』を左久良書房から刊行
37歳	1907(M40)年	5月	第四小説集『滄声』を彩雲閣から刊行
38歳	1908(M41)年	6月	死去

佐伯の自然などが、国木田独歩の思想に与えた影響を指摘している。本研究では、この一部の知見を2章で紹介する。また、初期の作品に着目した中島礼子¹⁰⁾は、日記『欺かざるの記』における「自然」が、すべての生あるものを含めた広い意味であったと述べており、工藤茂¹¹⁾は、佐伯を舞台にした文学作品と日記の関係を一部紹介している。その他には、唐木順三¹²⁾が、国木田独歩にとっての「自然」に着目するなど、国木田独歩に関する既往研究は数多くある。これらに対して本研究は、「風景の発見」の基盤としての意味を論じるために、日記や文学作品を構造的に分析する点に独自性がある。

笠原知子¹³⁾は、国木田独歩を紹介する際に、具体的な分析には基づいていないものの、「身の風景の細やかな変化を、身体で感受する彼の態度」が新しい風景観として広まったと述べている。また、吉村晶子¹⁴⁾は、風景論の展開を整理する中で、風景発見モデルでは「現実の風景体験の中身、すなわち、風景がどのように見出され、生きられたかといった風景体験の現象的側面について議論ができない」と指摘している。本研究は、国木田独歩を一人の人間として扱う点で、笠原の身体性という視点や、吉村の問題意識を引き継ぐものとして位置づけられる。その上で、国木田独歩の関心と見かたを明らかにして、「風景の発見」のメカニズムの再構築を試みる。

(3) 研究の方法

まず2章では、国木田独歩の人物史における大分県佐伯の位置づけと、佐伯での生活の概要を把握する。次に3章では、日記『欺かざるの記』の佐伯滞在期間を対象に、KH Coderを使用した計量テキスト分析に基づいて、当時の関心の所在を明らかにする。これらを踏まえて、4章では、佐伯を舞台にした5つの文学作品を対象に、国木田独歩の見かたの構造を分析することで、国木田独歩が無名の風景に注目したメカニズムを明らかにする。以上の分析を総合して、5章では、佐伯での国木田独歩の体験がもつ「風景の発見」の基盤としての意味を論じる。

2. 人物史における大分県佐伯の位置づけと概要

(1) 国木田独歩の人物史の概観

本節では、国木田独歩の人物史を概観することで、大分県佐伯の位置づけを把握する。まず、『国木田独歩集』掲載の年譜¹⁵⁾に基づいて、国木田独歩の略歴をまとめたのが表-1である。国木田独歩は、6歳(以下数え年)から17歳までの間、主に山口県で過ごしたのち、東京専門学校(現在の早稲田大学)英学部に入學し、在学中に受洗して、キリスト教徒になった。その後、再就職先を探し

ていた際に、徳富蘇峰から大分県佐伯の鶴谷学館という私立学校の教師を勧められて、23歳から24歳にかけての約10ヶ月間、佐伯に滞在した。国木田独歩は生前に、佐伯を舞台にした文学作品を5つ発表している。これらの文学作品に表-1内で★印を付すと、1898(明治31)年の「武蔵野」と「忘れえぬ人々」よりも前から後にかけて、継続的に発表していることが分かる。

(2) 大分県佐伯での生活の概要

次に、大分県佐伯での国木田独歩の生活について、先ほど同じ『国木田独歩集』掲載の年譜¹⁶⁾には、「佐伯滞在中の十ヶ月、カーライル、ワーズワースの書を読み、山野を歩き廻ってその自然に親しんだ」と記載されている。国木田独歩は佐伯での生活を振り返って、1907(明治40)年の「我は如何にして小説家となりしか」¹⁷⁾の中で、「此静閑なる一年間に自分は全く自然の愛好者となり、崇拜者となり、ワーズワース信者となり、明けても暮ても溪流、山岳、村落、漁村を遍り歩き、溪を横ぎる雲に想を馳せ、森に響く小鳥の聲に心を奪はれ、(後略)」、1908(明治41)年の「不可思議なる大自然(ワーズワースの自然主義と余)」¹⁸⁾の中で、「当時余は最も熱心なるワーズワース信者で、而てワーズワース信者に取りては佐伯町

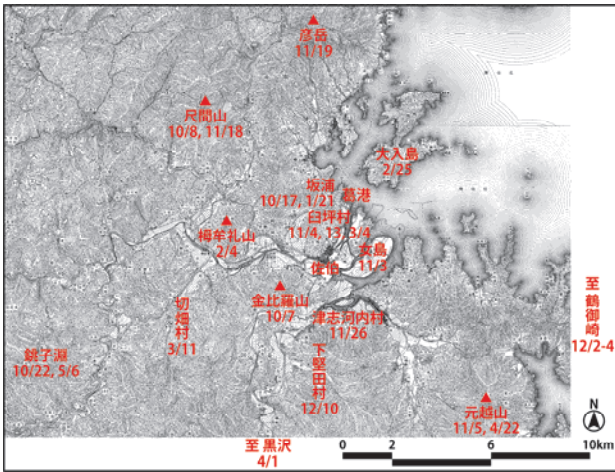


図-1 大分県佐伯での国木田独歩の遠行地(推定)

は実に満目悉くワーズワースの詩編其物の感があつたのである。山に富み溪流に富み、溪谷の奥に小村落あり、村落老て物語多く、実にワーズワース信者をして『マイケル』の二三は此処彼処に転がって居そうに思はしめた位である」と述べている。このように、国木田独歩は Wordsworth の作品と佐伯の自然を重ね合わせていたことが読み取れる。そこで、日記『欺かざるの記』^{19, 20}の記述を基に、国木田独歩の遠行地を推定し、年代が近い地形図^{21, 22}にプロットすると(図-1)、約10ヶ月の間に、周辺の溪流、山岳、村落、漁村などを巡り歩いて、自然と触れ合っていたことが確認できる。その他に、国木田独歩は主な宿泊場所の近くにあった城山によく登っていた。

また、小野茂樹による既往研究²³では、当時のおキリスト教異端視の傾向が強かった佐伯で、熱心な教会生活を送っていたことや、国木田独歩を排斥する運動があったことなどが述べられている。

3. 日記『欺かざるの記』における関心の所在

(1) 分析の対象と方法

本章では、国木田独歩が大分県佐伯に滞在していた当時の関心の所在を明らかにする。分析対象は、国木田独歩の日記『欺かざるの記』の内、佐伯滞在期間中の約10ヶ月分とし、底本には、鎌倉文庫発行の『国木田獨歩全集』^{24, 25}を用いる。はじめに、分析対象をテキストデータ化したところ、約12万5,000文字になり、膨大な量であったため、(2)では、計量テキスト分析のフリー・ソフトウェア KH Coder²⁶を使用して、全体的な傾向を把握する。具体的には、頻出語をリストアップして、特徴的な単語を把握したのち、Jaccard係数を計算した共起ネットワークを作成することで、共起の程度が強い単語同士の関係を明らかにする。(3)では、(2)の分析から得られた

特徴に着目して、日記の記述を読み解く。これらに加えて、(4)では、頻出語の上位には入っていないものの、国木田独歩の関心を明らかにするために重要であると考えられる Wordsworth と Carlyle の影響を考察する。

(2) KH Coder を使用した全体傾向の把握

a) 頻出語

まず、上位40語の頻出語をリストアップしたのが表-2である。ただし、KH Coder 上の未知語の分類(「此」、「也」など)と、副詞の分類(「然」、「実に」など)は、国木田独歩の関心を直接的に示す単語ではないと判断して、フィルタをかけて除外している。表-2をみると、一人称である「吾」の次に、「人」及び「人間」と、「自然」という単語が多いことが分かる。続いて、「見る」、「神」、「事実」といった単語が多く出現している。

表-2 日記『欺かざるの記』の頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
1 吾	1469	21 信ずる	144
2 人	427	22 信仰	144
3 人間	353	23 天地	143
4 自然	329	24 情	141
5 見る	293	25 凡て	141
6 神	264	26 知る	136
7 事実	263	27 言	135
8 嗚呼	240	28 人生	133
9 心	239	29 意味	121
10 宇宙	225	30 今	116
11 思ふ	194	31 自ら	108
12 能	188	32 美妙	100
13 爾	185	33 得る	94
14 生命	184	34 夜	94
15 美	181	35 月	93
16 来る	179	36 真	93
17 人類	170	37 希望	91
18 感ずる	154	38 事	87
19 可	153	39 読む	86
20 在る	146	40 去る	85

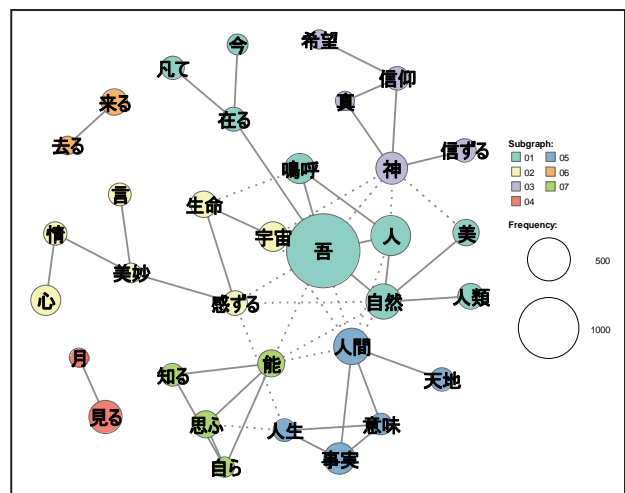


図-2 日記『欺かざるの記』の頻出語の共起ネットワーク

b) 共起ネットワーク

次に、上位40語の頻出語(表-2)を対象に、上位50の共起関係を描写した共起ネットワークが図-2である。サブグラフは、modularityに基づいて、お互いに共起の程度が強い単語のグループを示している。出現回数が多い単語に着目すると、1番のサブグラフには、「吾」、「人」、「自然」が含まれていて、出現パターンが似ていることが分かる。5番のサブグラフには、「人間」と「事実」が含まれていることから、国木田独歩が「人間」を「事実」として認識していた可能性が考えられる。3番のサブグラフをみると、「神」は「信ずる」、「信仰」と共起の程度が強く、キリスト教に関連していると推測される。

(3) KH Coderによる分析に基づいた日記の読解

本節では、(2)の頻出語と共起ネットワークの分析から得られた特徴に着目して、日記『欺かざるの記』の記述を読み解く。例えば、1894(明治27)年2月14日には、「人間は此大自然を忘れて考ふ可からず。自然は人間を度外視して究むる能はず。人と云へば自然と答へ、自然と言へば人と答ふ。此不思議なる両者の関係果して如何。」という記述がある。このように、国木田独歩にとって「人」と「自然」の関係が追究テーマであったことが読み取れる。1893(明治26)年11月21日には、「自然。生活の実際。之れ吾が深く観んと欲する所の者なり。事実なる哉。見よ人生の事実を見よ。天の下に地の上に人間が暮らしつゝある実際の事実を見よ。而して自然を見よ。」という記述がある。このように、国木田独歩は自然の中で生活していた「人間」を「事実」として認識して、関心を抱いていたと考えられる。

(4) 海外文学の影響

さらに、日記『欺かざるの記』には、海外文学に関する言及が随所にみられた。上位40語の頻出語(表-2)には入っていないものの、表記ゆれ(「ウォーズウォルス」、「ウォールズウォース」など)を合計すると、Wordsworthは42回、Carlyleは36回、出現していた。

a) Wordsworth

そこで、Wordsworthに関する日記の記述をみると、例えば、1893(明治26)年11月4日に、次のように述べられている。「夜、観察の爲め、独り散歩す。北町の寂びしき士族原を横ぎり、古河町の暗き裏町を過ぎ、船ど町に至りそこにて長田氏に遇ひ、伴ふて帰り、路にわかれて帰宅す。此のさびしき市街！ウォーズウォルスが村落を見たる同情を以て観せしめよ。意味深き物語りなからめや。市街にすむ人々も亦た人間なり。天地間に於ける人間ならん。其の生存、生活は意味ある者に相違なし。或はラヴ、或は悪、或は高き感情、皆な彼等を動かす者ならぬ

はなし。うす暗き燈障子にうつりたる家、戸しまりて人げ空しき家、軒破れてかたむける家、笑ふ声のもるゝ家、かの鍛冶屋彼の桶屋彼の乞食彼の小供等彼の理髪所彼の井戸、豈に意味深き物語なしとせんや。記憶せよ。皆な天地間に存し、此自然の中に起る事実なり。高き所より見下ろせ。豈に深趣ある物語なしとせんや。吾が天職は人々が一層深き注意、感情を以て自然と此の人生とを見んことの爲めに尽すにあり。」このように、国木田独歩は「自然」の中で生活する「人」や「人間」を「事実」として観察する際に、Wordsworthと同じ見かたを目指していたと考えられる。

Wordsworthの具体的な作品としては、「マイケル」、「雲の如く漂ふ」、「ハイランドガール」、「不死のオード」などのタイトルが日記に記載されている。例えば、2章(2)で参照した「不思議なる大自然(ワーズワースの自然主義と余)」においても国木田独歩が言及していた「マイケル」²⁷⁾は、マイケルという名前の牧羊者を主人公に、自然の中での生活と人生を描いた作品で、国木田独歩の見かたが影響を受けていることが分かる。

b) Carlyle

その一方で、歴史家のCarlyleについては、1893(明治26)年10月26日の日記で、「思ふにカーライルは歴史家なり、故に彼の人生観や英雄論や、悉く之を此不思議なる自然と人類との対照より得たる者に非ざるか。彼は自然を觀たり。而して人類の歴史を觀たり。思ふに彼の莊嚴なる思想、鬱勃たる感情は茲に発したるに非ざるか。彼は此の靈變無窮の自然の底に神聖なる者を觀たり。人類の生死を痛感したり。人類の変転する跡を觀たり。已に此の如し。彼はたしかに予言者となりぬ。」と述べられている。このように、国木田独歩のCarlyleに対する理解は、自然との関係の中で、人類の歴史や、一人ひとりの英雄を見出すものであったと考えられる。なお、Carlyleの具体的な作品としては、主に「英雄崇拜論」や「ゲーテ論」が言及されていた。

4. 文学作品における国木田独歩の見かたの構造

(1) 分析の対象

本章では、生前に発表され、大分県佐伯を舞台にした文学作品5つ(表-3)を取り上げて、2、3章を踏まえながら、国木田独歩の見かたの構造を分析することで、国木田独歩が無名の風景に注目したメカニズムを明らかにする。小野茂樹²⁸⁾によると、遺稿「吾が土曜日の夜」や、発表年代・掲載雑誌不明の「潔の半生」など、佐伯に関すると思われる作品が他に何点かあるものの、これらには未完成の部分、経緯が不明な部分が多く含まれるため、本

表-3 大分県佐伯を舞台にした国木田独歩の文学作品

年	月	タイトル	主要登場人物とその関係人物
1895(M28)年	5月	豊後の国佐伯	紀州乞食
1897(M30)年	8月	源叔父	源叔父, 妻百合, 子幸助, 紀州乞食, 女乞食, 宿の主人夫婦
1898(M31)年	8月	鹿狩	鹿狩の同行者, 獵師, 父上, 母上, 兄上
1900(M33)年	12月	小春	小山
1904(M37)年	3月	春の鳥	六蔵, 六蔵の母, 田口

研究では分析対象外とする。分析の底本としては、「豊後の国佐伯」, 「源叔父」, 「春の鳥」は『国木田獨歩集』²⁹⁾, 『国木田獨歩集』に掲載されていない「鹿狩」と「小春」は『武蔵野』³⁰⁾を用いる。まず, 対象とする5つの文学作品と事実の関係を以下に示す。

a) 「豊後の国佐伯」

『国民新聞』に連載された「豊後の国佐伯」では, 大分県佐伯の滞在を回想するという趣旨の説明に続いて, 6つの事柄(梟声, 乞食, 城山, 黄昏, 番匠川, 柿)が記述されており, 事実を描写した作品であると考えられる。

b) 「源叔父」

国木田独歩は, 1907(明治40)年の「予が作品と事実」³¹⁾の中で, 「源叔父」について「源叔父其人も『紀州』と称する乞食の少年も実在の人物である。余が豊後の佐伯町に居た時非常に接近せるのみならず言葉も交はし其の身の上に就き深く同情を持ちしことある人物である。而して此一編中に記述したる此兩人それぞれの身の上の事も事実である。けれども此兩人を結びつけたのは余の想で, これを結びつけて初めて此一編が作品となつたのである。」と述べている。このように, 国木田独歩は実在する人物に基づいて, 一部フィクションを付加していた。

c) 「鹿狩」

1893(明治26)年12月5日の日記には, 12月2日から4日にかけて鹿狩に出かけたことが記載されていて, この体験をベースにした作品であると考えられる。

d) 「小春」

「小春」は, 『ゾーズワルス詩集』をきっかけに, 大分県佐伯の滞在を回想したり, 当時の日記を読んだりする作品である。したがって, 「鹿狩」と同様に, 実際の体験がベースになっていると考えられる。

e) 「春の鳥」

国木田独歩は, b) 「源叔父」でも参照した「予が作品と事実」³²⁾の中で, 「春の鳥」について「此一編の主人公, 白痴の少年は余が豊後佐伯町に在りし時親しく接近した実在人物で, 此少年の身の上話は皆な事実である。しかして此少年が城山で悲惨な最後を遂げた事は余の想である。」と述べている。すなわち, 国木田独歩は「源叔父」と同様に, 実在する人物に基づいて, 一部フィクションを付加していた。

(2) 分析の方法

3章の分析では, 国木田独歩が「人」と「自然」の関係を追究していたことや, 自然の中で生活していた「人間」に関心があったことが明らかになった。また, 既往研究では, 柄谷行人³³⁾が「忘れえぬ人々」を引用しながら, 国木田独歩は「風景としての人間」を描いたと指摘している。これらを踏まえて, 本章では, 文学作品内の「無名の人間」に着目して, 一緒に描かれた風景や心情との関係を分析する。

具体的な手順としては, まず, 主要登場人物(源叔父など)と, 主要登場人物と血縁といった特定の関係がある人物(源叔父の妻百合など)をリストアップする(表-3)。次に, 作成した人物リストに該当しない人物, すなわち, 本研究で「無名の人間」として取り扱う人物の描写を含むパラグラフを抜き出す。その中から, 人物描写, 風景描写, 心情描写を抽出して, 似た性質のものをグループ化する。これらを一つの図に示すことで, 国木田独歩の見かたの構造を分析する。国木田独歩が「事実」として観察していた人物及び風景の様相と, それに対する心情を読み取る, という分析の意図を考慮して, 「無名の人間」と, 国木田独歩自身, 主要登場人物, その関係人物との直接的なやり取りや会話文は, 分析に含めないこととする。描写を抽出することで, 文学作品の文脈における意味は読み取れなくなってしまうものの, 前述した分析の意図は達成できると考えられる。

例えば, 「豊後の国佐伯」の城山に関する説明から, 「無名の人間」に該当する3人の村女を含むパラグラフを抜き出すと, 次の通りである。「一夜強風起り, 庭園の樹木さへ多少の害を被りし時, 独り城山に登りて其背面のもの寂し気なる処に至れば, 葛葛纏ひたる石垣の蔭に人の声きこゆ, 近づけば三人の村女可憐の姿にて折れ枝を集め居たるを見しより, 古城の跡なほ優しき血の通ふが如きを感じたり。」このパラグラフからは, 「葛葛纏ひたる石垣の蔭に人の声きこゆ」, 「三人の村女可憐の姿にて折れ枝を集め居たる」という人物描写, 「其(城山の)背面のもの寂し気なる処」という風景描写, 「古城の跡なほ優しき血の通ふが如きを感じたり」という心情描写を抽出することができる。

(3) 文学作品における国木田独歩の見かたの構造

上記の手順に沿って分析をおこなった結果, 「無名の人間」の描写を含む21個のパラグラフから, 33個の人物描写, 37個の風景描写, 8個の心情描写が抽出された。似た性質のものをグループ化して, 一つの図に示したのが図-3である。図-3から読み取ることができる国木田独歩の見かたの構造と, それぞれの風景の性質は, 次のa, b, cの3点にまとめられる。

a) 人々の賑やかな様子とまちの寂然とした様子の対照：
聴覚による見かたの形成

まず、人物描写の中では、「人々の会話・声、賑やかな様子」という大きなグループができた。例えば、「豊後の国佐伯」では、「終日茲(市街の河岸)に小舟群がりつどい、色黒き舟子。赤き襟つけたる村女。(中略)孫女を連れたる翁などの己がじしざわめく」、「源叔父」では、「番匠川の河岸には何時も渡船集ひて乗るもの下るもの、浦人は歌ひ山人はののしり、最と賑々敷」と述べられている。このように、「無名の人間」の河岸などでの賑やかな生活が事細かに描かれている。

その一方で、例えば、「小春」には、「村々浦々の人、既に舟と共に散じて昼間の喧しさに似ず最と寂びたり」という風景描写があり、まちの寂然とした様子にも言及していることが明らかになった。

これらの描写から、人々の賑やかな様子とまちの寂然とした様子の対照的な構図を読み取ることができ、相互に見かたを形成する要因になったと考えられる。これらの風景には、視覚だけでなく聴覚によって体感する性質があったといえる。

b) 昔から変わらず続く生活とまちの変化の対照：時間軸による見かたの形成

人物描写をさらに細かくみていくと、「豊後の国佐伯」の「木立村の農女等朝早く小舟に乗じて城下に来り」といった「小舟を用いた生活の様子」のグループ、「小春」の「野は麦撒に忙がしく女子皆な男子と共に働き居たり」といった「家事・農作業の様子」のグループ、「豊後の国佐伯」の「街頭宜しき場所に、老翁、老婆、籠を置きて客を待つ」といった「商売の様子」のグループができた。これらのグループには、それぞれ佐伯の自然と密着した日常生活が数多く記述されている。こうした描写を受けて、「小春」には、「何心なく眺めて在りし吾は幾百年の昔を眼前に見る心地して一種の哀情を惹きぬ」、「我は古き物語の村に入るが如き心地せり」という心情描写がある。すなわち、眼前の日常生活の風景が、昔から変わらず続いていたであろうことに、国木田独歩の心が動かされたと読み取ることができる。

その一方で、「源叔父」では、昔の海岸沿いの風景や、崖の開発といった「まちの変化」と併せて、「源叔父が家一軒ただ此磯に立ちし其以前の寂さを想ひ給へ」という心情が述べられている。

これらの描写から、昔から変わらず続く生活とまちの変化の対照的な構図を読み取ることができ、aと同様に、相互に見かたを形成する要因になったと考えられる。bの二つの見かたは、そのとき眼前にある風景を観察するだけでなく、時間軸の中で眼前の風景を客観的にみる点で共通している。

c) まちから離れて自然の中に身体を置いたときの懐かしさ：身体による見かたの形成

最後に、「小春」では、土河内村について、「かつて山の頂より遠くこの村を望み炊煙の立のぼるを見てこの村懐かしく我は感じぬ」、また、元越山に登頂したときのことについては、「自分は一種の哀情(メランコリー)を催し、これら相重なる山々の谷間に住む生民を懐わざるを得なかった」と述べている。このように登山などの遠行によってまちから離れて、自然の中に身体を置いたとき、人々の生活とまちを懐かしく感じた体験が、人々の生活とまちに深く関係するaとbの見かたを形成する要因になったと考えられる。2章(2)で確認した通り、大分県佐伯での国木田独歩の遠行地は広域にわたっていて、自然の中に身体を置く体験を繰り返していた。

5. まとめ

本研究は、大分県佐伯滞在期間中の日記『欺かざるの記』と、佐伯を舞台にした5つの文学作品を分析対象にして、佐伯における国木田独歩の関心と見かたを明らかにすることを目的とした。

3章では、KH Coderを使用した計量テキスト分析に基づいて、日記の読解をおこない、当時の関心の所在を明らかにした。具体的には、国木田独歩が「人」と「自然」の関係を追究していたこと、自然の中で生活していた「人間」を「事実」として認識して、関心を抱いていたことが明らかになった。そして、これらの関心が受けたWordsworthとCarlyleの影響が読み取れた。

4章では、文学作品から「無名の人間」の描写を含むパラグラフを抜き出し、パラグラフ中の人物描写、風景描写、心情描写の関係を分析した。その結果、a)人々の賑やかな様子とまちの寂然とした様子の対照、b)昔から変わらず続く生活とまちの変化の対照、c)まちから離れて自然の中に身体を置いたときの懐かしさ、という国木田独歩の見かたの構造を読み取ることができた。それぞれの風景の性質を踏まえると、国木田独歩が無名の風景に注目したメカニズムとして、a)聴覚、b)時間軸、c)身体による見かたの形成が明らかになった。

以上の知見を総合すると、「風景の発見」の基盤となる国木田独歩の見かたは、大分県佐伯滞在中に時間をかけて、かつ、身体を通して形成されたと結論づけることができる。柄谷行人が指摘しているように、「風景の発見」によって新しい風景を描くためには、「ある内的な転倒」、すなわち、見かたの変化が必要である。この変化は、国木田独歩の場合、瞬間的に発生したのではなく、その前段階として、佐伯滞在の約10ヶ月をかけて見かたが形成されていたことに起因すると考えられる。そして、

この期間に、聴覚、時間軸、身体といったあらゆる感覚を働かせて、眼前の風景を生々しくリアリティをもって感じる体験を蓄積していたことに、「風景の発見」の基盤としての意味があったといえる。

参考文献

- 1) 柄谷行人：定本 日本近代文学の起源, pp.7-40, 岩波書店, 2008.
- 2) 小野茂樹：若き日の国木田独歩 —佐伯時代の研究—, p.11, アポロン社, 1959.
- 3) 前掲1), pp.41-137
- 4) 木股知史：＜イメージ＞の近代日本文学誌, pp.85-88, 双文社出版, 1988.
- 5) 勝原文夫：農の美学, pp.19-25, 論創社, 1979.
- 6) 加藤典洋：日本風景論, pp.165-214, 講談社, 2000.
- 7) 李孝徳：表象空間の近代 明治「日本」のメディア編制, pp.253-257, 新曜社, 1996.
- 8) 岡島直方：国木田独歩『忘れえぬ人々』に描かれた「風景」の性質, 南九州大学研究報告, No.42, pp.49-59, 2012.
- 9) 前掲2)
- 10) 中島礼子：国木田独歩 —初期作品の世界—, 明治書院, 1988.
- 11) 工藤茂：独歩における佐伯, 別府大学紀要, No.35, pp.1-9, 1994.
- 12) 唐木順三：国木田独歩における自然について, 唐木順三全集 第一巻, pp.122-135, 筑摩書房, 1967.
- 13) 笠原知子：技師たちがみた江戸・東京の風景, pp.137-138, 学芸出版社, 2010.
- 14) 吉村晶子：風景論の展開 —構造と反構造のダイナミズム, 日本風景史 —ヴィジョンをめぐる技法, pp.379-423, 昭和堂, 2015.
- 15) 国木田独歩：明治文学全集66 国木田独歩集, pp.382-390, 筑摩書房, 1974.
- 16) 前掲15), pp.382-390
- 17) 前掲15), pp.300-301
- 18) 前掲15), pp.310-312
- 19) 国木田独歩：国木田独歩全集 第五巻 欺かざるの記 前篇, pp.319-488, 鎌倉文庫, 1948.
- 20) 国木田独歩：国木田独歩全集 第六巻 欺かざるの記 後篇, pp.3-176, 鎌倉文庫, 1948.
- 21) 大日本帝國陸地測量部：五万分一地形圖大分二號 臼杵, 1904.
- 22) 大日本帝國陸地測量部：五万分一地形圖大分三號 佐伯, 1905.
- 23) 前掲2), pp.33-43, pp.99-106
- 24) 前掲19)
- 25) 前掲20)
- 26) 樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析【第2版】 内容分析の継承と発展を目指して, ナカニシヤ出版, 2020.
- 27) 田部重治選訳：ワーズワース詩集, pp.60-89, 岩波書店, 1966.
- 28) 前掲2), pp.176-194
- 29) 前掲15), pp.12-19, pp.105-109, pp.268-271
- 30) 国木田独歩：武蔵野, pp.180-194, pp.210-229, 岩波書店, 2006.
- 31) 前掲15), pp.303-306
- 32) 前掲15), pp.303-306
- 33) 前掲1), pp.24-29